消防団員 苦闘の記録

「住民が逃げないと逃げられない」

66人の証言集刊行

東日本大震災で住民の避難誘導や救助活動にあたった消防団員ら66人の証言を集めた「消防団の闘い―3・11東日本大震災―」が近代消防社から刊行された。家族や仲間を失ったり、自ら津波にのまれたりしながらも懸命に活動した様子がつづられている。

「消防団の闘い」は、254人の消防団員が死亡・行方不明となった震災で、団員らがどのような活動をしたのかを記録に残そうと、財団法人「日本消防協会」が企画・編集。防災の専門家ら6人が一人一人から聞き取った。

インタビューに答えた一人で、11人の同僚団員が犠牲になった岩手県大槌町消防団第2分団の鈴木亨さん(42)は、「津波が来たら高台に逃げるよう防災教育を徹底すべきだ」と訴える。

「3月11日は、勤め先の漁協の冷凍倉庫にいました。揺れがどんどん大きくなったので津波が来ると思い、揺れている最中に自家用車で水門に向かいました」。鈴木さんは証言集で、あの日の行動を振り返る。

大地震が起きた際、消防団員は最寄りの水門を閉鎖し、詰め所に集まる決まりになっていた。鈴木さんは詰め所でポンプ車に乗り換え、ほかの分団員と担当する水門がすべて閉鎖されているのを確認した。避難誘導中、津波を見に行こうとしていた中学生に「お前たち死ぬぞ!」と叫んだ。その後、高台へ向かう途中、津波が町を襲うのを見た。

「あと5秒遅かったら、この世にいなかった」

五つの分団がある同町消防団では団員16人が死亡。うち11人が、海沿いを管轄する第2分団員だった。「寝たきりの家族を助けて」と住民に頼まれ、救助中に犠牲になった団員や、津波を知らせる半鐘を鳴らすうちに津波にさらわれた団員もいた。「住民が逃げないと、消防団は逃げられない。団員と住民のどちらを取るか、その時にならないと答えは出せない」。1年以上が過ぎても、鈴木さんの心から葛藤は消えない。

鈴木さんは、団員や住民を守るには「『地震があったら津波と思え。高台に逃げろ』と、自分たちが学校や家で教えられてきたことを義務教育で教えることが必要だ」と証言集でも訴えた。「死にたくて死んだわけじゃない。逃げてほしかった。助かってほしかった」。犠牲になった仲間のためにも、あの日のことを伝え続けようと鈴木さんは決めている。

鈴木さんを含む大槌町などの団員12人にインタビューしたNPO法人「環境防災総合政策研究機構」の松尾一郎事務局長は「団員は家族や同僚を失っても、救助や遺体捜索にあたった。それにもかかわらず、『入団して良かった』と口をそろえたことに胸がつまった。被災後の過酷な状況を示す貴重な資料だと話す。

「消防団の闘い」に収録された主な証言 ※肩書、年齢は掲載時のもの

岩手県山田町消防団 第2分団分団長 **糠盛(ぬかもり)祐一さん(47)**	火災が広がり、住民約1000人の避難が必要に。3日3晩不眠不休で避難支援と消火活動にあたった。「消防団に入って良かった。大きな災害で人のためになれた」
宮城県女川町消防団 第3分団副分団長 **川添丈さん(72)**	遺体の搬送、安置も納得できる対応ができなかった。「暖かなものでくるんであげたいと思っても、拾い集めた濡(ぬ)れたままの毛布や布団に寝かせなければならず、ほんとうに情けなかった」
仙台市宮城野消防団 高砂分団班長 **川村康裕さん(56)**	救助活動などをしていた同僚2人が死亡。「衝撃を受けた。しかし行方不明者が多数いる。その団員の分までやらないといけないと思った。やるしかないと」
福島県いわき市消防団 第7支団副支団長 **渡部喜和さん(63)**	ポンプ車で避難を呼びかけた後、津波にのまれる。車外に放りだされ電柱に引っかかって助かった。そのまま救助活動に専念し、「ずぶぬれであることさえ気づかなかった」

消防団員らの証言をまとめた「消防団の闘い」

プレハブ建ての詰め所前で、新しく掲げられた看板を見つめる鈴木さん